



1551
08

Handwritten text in cursive style, including the title **竹毛詩** (Take no Uta) and several lines of poetry. The text is written in dark ink on aged paper.

Red square seal impression at the top left of the page.

Red square seal impression at the bottom left of the page.

Vertical title or section header in the center of the page.

Red square seal impression in the lower right quadrant of the page.

1272
20

河海抄卷第二十

正六位上物語博士源惟良撰

第五 蜻蛉

卷名



ありとみくぬかんとて夜とて松又ゆかすか次し
かこめ人てねとせむと

彼毛詩

このころれむら春の人よとちねゆらあむか
古も流るとせりけり
かろくこのとせりけり
かろくこのとせりけり
かろくこのとせりけり

世中れれをむらむらむらむらむらむらむらむら
みくぬかんとて夜とて松又ゆかすか次し

ふれりやわらふはふらふとまれとてはたけたりとて
い車としくい乃ふのまらるる原よちりく人色らくもせ
とふ乃あか、ちうもわらじ乃らりしとやう

上曰吾聞黃帝不死今有冢何也或曰黃帝已僊上天
群臣葬其衣冠史記

曰夏本紀身五饒速日尊東天祚御祖詔乘天磐舟而
天降既神損去坐矣高句麗產靈以為衣法即使速
飄令以命將上か天上処其神屍骸か天上殺竜矣饒速日
為以夢教か妻御炊屋指云汝子如吾所見物即天靈瑞矣
矣亦天射弓之矢後神衣帶午貫三物卷殺か登教日庭色
以為墓者也 略記

日本記身七時日武為化白鳥從陵か指倭國云花之群臣亦
同開其柩掘り親之明衣宜留る屍崩云々然遂之朝上

天後葬衣冠

衣衾と葬しり是亦例也

あつ人法くよ 附 日本記傳

此くふりたかたわらにむとくか

可憎病鶴奉夜驚人薄媚狂鷄三更唱曉 遊仙居

ちれんまつてあわくれあり

いこもふりさくかありそいれり

人々をたれあつたはれあつたありこらそつて物あり

人水木石皆有情 不如不遇飲城色 白氏文集

心水木石豈忘深恩 拾仙家

ありふりり 長勢

日色ゆくれしものあられあり

かか衣日色久書よあつたあつた人々

仁王伝云
初念識
異木石生
得善
生得

らんゆ〜ゆるな

世にのちなりてこゝろきれいなるは漢のおよそ

いふ言ふこのらんせぬうつよまんこのもの物語りわりてい

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり水原抄

ゆい〜いりありていふの漢ありていふはらんせり

人のいふはらんせりていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

らんせといふもいふの漢ありていふはらんせり

仁徳天皇十二年四月八日威顔回大中臣良彦皇子藤原

周鶴内皇子自山上宮一膳中中乃地を取む意仍體使

之令視還來之曰哀也因嘗用鶴梅墨又山宮曰之曰其

野中名何者美格之曰水宮也皇子其若此何之矣用帝

曰塘去丈餘以茅蓋其上敷敷芽採取水以覆其上雖夏

月之不津用之為瑛月侯水酒以用也皇子則持來其

冰獻于御所天皇飲之曰乞以後每為壽者乃也氷于

春分敷水也

御主人の誠よけらるゝものなり

碩女若くは後彩色也 長根奇傳

進い乃ておけりたり下三よ物くさるるごとくあり
一りふもやゝりし御座りしはゆり芥河野大物のとて
こは女一文思ひをゆるぬの夕書り

古物種れ 水原物と遠君と或又十君と一止仍如
自筆物とてゆふとありふの中物とありと恵心僧都
代勸女造生文とて物よはらぬ乃中物長女代後傳見
乃存ありと古物種あつとつゆりて乞ふ今世より不傳
とあり河の中物ゆりゆりのことあり
是とていしつちまはりしはいしよ

此は
蛤
文の
名

拾遺東三條院所記十九日甲子月
文の君ありとていしよ

拾遺東三條院所記十九日甲子月
文の君ありとていしよ
かむねとていしよ
女師親みとていしよ
女師親みとていしよ
御中なることありとていしよ
存言 老人曰也

大庭守尉の忠告 就中腸断 乞秋天 白樂天作

故之の織半寸并小絃可穿 氣絶眼見苦憐め

ありたれとていしよ

奏后

は舟君の身とるまゝ海の川に流るるに流るるありて
とつ洞をのちに空くありて山乃事蹟る先て
ありてまゝいりてと先乃事蹟るまゝのまゝありて
仍考る事蹟るまゝのまゝありての北の川に流るる
たうやん人ともまゝありてまゝありてまゝありて
りやありてまゝありてまゝありてまゝありて

比叡山三塔 東塔 西塔 横川

僧如とて擬惠心僧如歟道也後隱居横川
母事妹女奏后事お似たり傳記曰僧如名大和國葛城下郡
人父名右部正親母信原氏也母夢天人下授一男三女其年
覺後四人去可成成人歎思之去後母令所生息長命記

之如夢中傳來金与一珠見年不久懷妊生男子即七也人
傳如是也成人後有子孫定山出家文戒修學業既成
後系使擇同也約云臨願禱禱年為寂初得地一同
の令恍惚送其地於母之母返報云吾不送地於不恍惚
不取名道也修通之管也一師母命正親隱居干横
川若修淨土業寛弘元年五月廿日官任授大僧如辞表
一期不備若根名念仏二万俱反情強大家師五万五
奉念阿弥施大呪百万及為勝施摩尼三十万及子
七十万及仏眼不動の念之不退道進又不造書
其申佛生要集三之一系要波三系珠勝采朝朋聖壽
佛生要集指化所作撰表讚嘆寛弘三年十月廿日
非常淨力口無取痛補以淨心念念於百友如眠終
給年七十六而大和地修云云

世のほのぼのからいふにみるにありあつたことなるの

よふととふありあつたりなり

よふととせうれこむり山こむりわかあつこといひつて
かりをまねたかきりのほちかりとやのあらの信とを
やれとあまきく

惠心僧初妹女表終孝の時名必可来舎より僧初契幼
し而僧初子日山終く同自庄許来遣云老病少安羅
成平今一安對而大切之改於限日較山終新お洛可
我公宗與可泰西坂わく中返答平松下松名也お洛處
與之訓重僧初進寄泰蓋貝之狐尾上既逝去お去與
河清公流房清公先心經七卷讀也次大書院令お
惠心又奉念比義別上授生古事談

お初お名は三密也お初お名三業也故三密といふ業なり
おしり紙お初といふなり

あつたりあつたり

古人云長林く然る中神也天一神首守天也常事

瓜朱雀院れつとやうやくうらの院とつ句あり

平等院建立いおすう洛院不頁二川物

あやうれいのちとつ心とはくつこととに海

退也 下

一所ありあつたりあつたりあつたり

たふん身毛聖神のら須唐人約幾お所おまら向ん

さい初の人おるんくおとらひむくことせ

水後三飲め天を及の國あつとことふよあつと
わておしゆりお中にお女あつとあつとあつと

男子一人らりうかて月日ばさしとに家よあつた十月
みもばらうきてたとけくありありと女はみゝるよ
ほむれん女しくたらくたにばあをいづるまれ
やもつらういふ女もさう女もいづくせん
かうとの女さつりくつ河の女さつりくつあま
くんとと女さつりて野干ともて難いこのあ
てつらりたり

帝王系萬云周師や冬川回航成人書古塚有航奴賢老
化の婦人秋色好ん愛雲繁雨變糖大丸英作也紅
裳深竹倚荒村路日秋後時人靜念或秋或秋也
啼白氏文集夕秋去てゆ也

樹林木神繪懸晒空無脚焉春屋傳河橋懸山林異氣

而世為大容尊也
枕さしよ 秋名又歌

屋まのこいさふあをいづく
いしありせんらもれ色ありせんうねるやあんと

文殊揚自之呪事八 舊化三 号同呪

人よらりうかて誰かりヨ
秋名のあさうし物あははへのら 林か
あやうしめうらうれ人あり 不用

人乃これあさうしめんしあまうりれ地もこころい
假色達人松古氣迷色迷入惑色比白氏文集 古橋楓

それあさうしれしよ 葬は 報事

此のころに... 予のよき... 約する

伊勢物語云小野のゆゑあり... のありしに...

... 小野の大原山... 伊勢物語... ありしに...

... 大原村也... 有産と云わ... ありしに...

... 予のよき... せせせ

邪氣の汚護摩壇... 焼灰の事ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

端正者辱中來... 大集位文

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

五戒十戒... 五戒一切威儀戒... 細隠... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

... 予のよき... ありしに...

加護に相授る能く幸合致はるに據昔紀僧正（西行）
 珍生（日持）戒の究らるる邪執を為す天狐道者惱むる
 お思はば授護は天狐仍に我は難傳は天狐也矣（威徳）此の
 志得結縛之使ん（し）若し後不堪威儀（威儀）而折也（礼）此の
 後日は優柔任的の教戒、自奉如も同結縛天狐也
 以後は来し中帰伏し後他脱牟剛台後即常（し）
 此に云（し）し傳り官后（り）也との対合致らる久快結縛
 入行たまらるて如何し（し）らる平論の後の事（し）りて
 年来の行末と趣向して授てたか（り）る也（し）結縛
 の常にも右と云（し）らる（し）らる（し）らる（し）と智徳大師秘
 らるよお徹志結縛結縛見らるらる色わらる（し）
 ありなる厭のやに（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 たりるおとの能くみらる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 付（し）徳上人胡勒上人（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 か（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）

伊豫物徳文の形り男長と云（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らるその津より（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 され面（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）
 らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）らる（し）

一
 一
 一

ふつとわきこころありぬとて思ふくみなりて
ありてと

上東つ後のゆわかにいふこととわあう榮記地流く
みさういれりなりぬものもいふさなれとわきことなりて
わうさいれん也野文方合保平集より志この方たて
されとありて下集

いづみかきめたること
らあかりいこととんかきとたり人のありやうと
なふよふのありてこと
ふいれぬことと略者ラウ
人にいふんやうぬのいふれりともいふやうぬ
と

水鏡 三ノカキ 桂仙宮 蓮子教皇令酒松枝一曲風春歌平天の釣道蓋推

一説云水鏡書とくくやうとけりく菓子乃なる小稿矣
ゆとく先昨うけの念あはれ稿矣なるふ
あつことくおとん人のこといふとあかりに上
つれやう

わきぬにむかひたさるよれを思ふこと
んぬとむかひたさるよれを思ふこと
後文後後とゆきとめて深なる也
とくことなりてなめはんとくこととみくさう
てう人のいふことなり

らめとあめゆかんと女師就人の地なりしめ地世に
有中納をいふありは 鬚黒大臣息
小師の石の舞れ中只今此人舞者なり
御まゐりし略

わだの

水合合と云ふと云くわくわく其く切まんもわら
さゆと云くもるわく又此と云合とわくはと云
ら縁と云わだあり亦云と云人とも云くは物物下
抄めし前と云ふもはたはわだゆりことめとて云
わくしんると云わ

分十と日のはと云くわりゆるくはと云く

百十九

心せりよは秋志のたはゆりくわくわくはと云く
新花より小雲より縁よりと云くは也
巻く集よりと云く

秋のいりも言わく女師範にゆく中人宿に云ん

わきよと云くらのこのと云んみかみと云く

新と云くわらわの女師範社をり地と云く人をわりは

うと云くわくわく

花と云くわんともは女師範と云わははと云く

去のあゆみありと云くはと云く

心置に秋こそことと云くは秋は秋と云く

みと云くわらめと

世のうらみと云くわらへんめり

わくわくはと云くはと云く可憐^{アキラカ}なり

と云くはと云くはと云くはと云く

と云くはと云くはと云くはと云く

と云くはと云くはと云くはと云く

と云くはと云くはと云くはと云く

と云くはと云くはと云くはと云く

と云くはと云くはと云くはと云く

書くべき名を内家坊河古原とすの南河をさすはあはれ
まじり河くともとす

はるばる河をさすことしかりくゆんといふまじりく
管人母好今石好古 瓶以小玉琴

ゆき生塵去 文集卷中

ありととよりりくくもと 松風入和歌 百詠
会作りかのかのわさわさせそと

義事家生活捨離ち心秀歌向死方

てよあがせりくそ ことのはあけ 自後こそ也
いのらえらりりふん次

余をにらりりる地あるま列のうりくは
物りらゆるとあふまことしと思人あふくと

初瀬川より河野色に二とあわ杖良とくすわん
二の秋

ゆきよあけと

きさくそいかに清く 基勢大池 肥か極極良利は名之質達
こころ用基の軍也

そとにことあらんつらーゆ達とす

北毛詩曰 白妻く北尚で磨也

の月珠 不結を那

まのんよら流いろのうあやうらくくちあきし
るにのりりくたはは

浪更 けりま物

とくまのりきく 嘆詞

いそらとらふあつちつちとらむをわくとあそ

鮎のちうけこととつら

くうらわらうとらうあつち

あまうとらうとらそのちうくさあつち
あまうとらうとら

んがらとくふ霞の中にあつてふと也
かれとてとをさうらうらふけり

法接

あいらゆるりまら日

信正の眼

たらしめえれをむしてあかろくはるんをさ
るてん云らうらふとふ

流情三書中 懸愛不能以 奇息入之 志実 師息者

あいらさむいさとりり 小掛 袈裟

ふみよらゆるをけり 和居 二回和居也

そわやしくせうのこはえんをけり 希有のふとの中

けむしちれけり 吹いこも

ふのわんおとめあいらふのこをけり ことごとくいふせ

凌園春 歌色ウ観余ウ紫ノ落を何 白氏文集

ねのよあうまうらうく月文細とや

ねの暇 月徘徊 日

ふの日後りとも次をのこともてんはるこなり

栞 晝日 凡 蕭瑟 日

くろくちのこいあうらさあひとこいあひし

夏 宿 栞 乃 暮 夕 音 乃 の こ い あり とも 意 向 也

くををせめしりのひ方なり 玉音 寂ふあ

つとひの色のわふさ日跡をくわうらう

廟 有 之 重 五 年

たうらひ 之 重 五 年 あり

とててくら木々のやめく

取 八 回 可 使 乃 橋 本 彦

からしこそこふくれのくら木をれ

君もそゆふよのあをしん

無 乃 言 の 暮 乃 言 ころの 氷 と あり し

わふとたろそつぬるこよふ

東方朝臣銀務よ音案以へて因融後よなとあり
まやじうのこを死にわも

月やわりのまをいし一のまのりり
あふらりしあいのちまきりや

あふらりしあいのちまきりや梅の花とまにぬれり
わやしくやうのりれしこにまきりや

何卒のやとまきりや
せり中比一のちとまきりや

た人信一とまきりや又一人もつ又執柄家
一解取指一人又偶一取

さうりりまきりや宿後
いふはるるるにまきりや

右近将監也董人ぬた也

こい何る近書
う一人よありしとまきりや
かこまらるるのちまきりや

黄泉 冥途のろま

月ここの八日あるとまきりや
毎月八日六日母日始也とまきりや
らうたうめらつてまきりや

根在中堂

延一七年傳教人建ましかる業師ぬた也
て後梵天帝尺四天を忠仁云日光月光
神力の量同白起道制

身七 夢又流橋

げ物須春名相垂しりも切みつらまき或何の家紙に
 あり武吉ののり紙りして考とり志らみけき紙著浮橋
 と起しりこし切めとみはとちめて何の古衆不意あり
 凡若るし橋と云何気より月乃須著此所のし橋
 とわりありしはさくつたり凡武院云も皆若まの
 又或るるまきりめて進したるふらわくくしひひは
 うれ橋と云いそ女若中云何人そわの又大物寄
 にならぬよあゆみのつれわりとゆふたたら多也
 けり紙のあらと女さく若くつるうい美儀高地故
 引さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 引さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 色よりゆきり言かんらわらとたに常迅速れたりと
 わり感者必裏の中とじこ紙志じらむとせしと見目
 と集りしはきりさくさくさくさくさくさくさくさく
 若りありわらと云こころの湿船線の生死を言わね
 と紙は又圓元紙は指知を生死由来紙生死没繋紙紙若
 吾男も紙着紙多夫生死乃く湿繋を死之滅也未夫
 去之惟穢福也未得去免垣外長中紙紙紙の生死也
 とわり内方の紙書よし若よつこくさくさくさくさく
 土門の言下と云言一対半若中紙着あ平虛と何れと此
 んふ次り浮橋と云何岸諾何毎為天の浮橋の上
 かりて夫持まぬ志きく陰陽と何れ例回と生せす紙
 の始也と進し紙と云女のさくふりたきり此漢紙の凡
 後信紙易ら何れとことと三百篇紙中開雅精紙乃池り
 龍巢湯慶の後よりやうい史何の通とて周在凡と
 の物より陰陽方地と生こく福也詩帝開雅信紙云池也

師の妃也前以凡能天下而正史尚家私用之野人家用之邦
周家とつり内道に浮橋を生死のたより煩悩の根元也身大
とけせむ世に流るる幻り憂めりといふ事あり難く世煩
悩即菩提生死幻涅槃の義いふことわづかれり依若已
説のふ既しゆあり者九次諸經の既わ皆序正流通の
二股わり流通を悉くばわしり原を途の故有りゆれば
徳のそひばるの浮橋と号し別名く二事のあらむ一は
一經の号あり一はたゞ光源氏物語といふこと一は或は
浮橋物語才木七法の神といふこと一は且も法と光源氏
やるといふこと一は七法定りしん誠の二十七者とい
えぬおもひいふこと一は也いふ若所法うし又以愚業
加問文の彼再之案と志實の義の若力一字のわづり
別のこと一は浮橋を名にいふこと一は出來起凡當流の

義の流るやと説よりして正統ととらぬ也ふれはた方代世
の中い若のわづりの浮橋とらばはは物語こそなりぬ
ふるもといふこと一は別の名あり一は此の義の若力
のうれとてゆへぬ一は東方と曰ふなり一は詮作は物語と
推してはは物語に花といふこと一は其義存子高云一曰たり
は枝在周の胡蝶をに死生は愛とありせり是物語の端
且も大受る後知ると大受ともいふなり漢語の高云と百
年の昔に化し和國の高云と一節の昔に於て世能物語
有り一切の及らぬ高云と説くは人を生生死涅槃
如昨若天宮地獄逍遙自在に在り高云四方七受也不知
こと受也高云ありて又とて受受受る後知ると高云且も
大受る後知ると大受也高云自心大受高云竊く受知と
是名なり年牧年周小也與汝高云高云高云高云高云

此の世を平流せし後一遇大蛇を解ふ乞止
昔遇之者名在周受の胡蝶柳の胡蝶也自余通ふ
與不知周也後始見劉遠の胡蝶也不知周の胡蝶と胡蝶
之受の周與周と胡蝶別必るか矣けい詔物化

一 名法の所

此の世を平流せし後一遇大蛇を解ふ乞止

山り松とて述いさるる也

とて後始見劉遠の胡蝶也

とのわり 小野信之 花仙雲

り〜さるる也

老字 老病也 一云勞也

何れか 松河 白氏文集 可定 万葉 可いやん也

昔のさりみそちとの一にさるる人のたるといふ

定無云いけり也

たよりのと頭を貝葺礼祀天稚彥並瓦逝の後下照天

衰と注りて後とていふ也 又後日本記云天武二年

十二月庚辰日庚子 天武 年 天武 年 天武 年

後赤肩の意 天武 年 天武 年 天武 年

唐ち死人の口を合志 天武 年 天武 年 天武 年

取離ふ姻懐と我朝と上た帝崩於時 天武 年 天武 年 天武 年

神代巻 天武 年 天武 年 天武 年

神代巻 天武 年 天武 年 天武 年

神代巻 天武 年 天武 年 天武 年

一 心不記阿蘇通經

らんくろの海の底の舟の舟人あはれいこめしなしく別せらる

天狗

黄帝伐蚩尤の時三月十日伐斬其首を上げ天狗

と身伏而凌地靈

なすらとく東下り成あはれち別して後三月十日舟人
の舟よりてい三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
ゆりちとせせと指指をせめい三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
ささい月日きりし海にむえんとし始とあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
おの卯月の昔とれんゆりちとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
中へよい月より年をむくゆり母の教ありしとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
てしゆりなるゆりちとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
小節たはあはれいこめしなしく別せらる

舟中しとゆりちとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
のまきとせせと指指をせめい三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
あはれいこめしなしく別せらる
しなしく別せらる
りしとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
と三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
かむしとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
月日中しとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
死人のやうゆりちとあり三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
なすらとく東下り成あはれち別して後三月十日舟人
三月十日舟人あはれいこめしなしく別せらる
あはれいこめしなしく別せらる
あはれいこめしなしく別せらる

うんとうみくせくゆわん公月十名こたうめ
乃はつくり来きりやみかりゆきはるくはく
色くつりの河もそんじ

かたさうじいんらむらむらんまはうきんせいに
あつたむん僧がひ日くさの河を坂本ゆくとら
らたつりこくはせりら

うんこのらうらうらうらうらうら
高又伝一そら地まきり

るゆわひとよりやうふゆふとらゆあうきこ

生と家と等倫八十そら法日本記

らあはくそくそらりて
そらあきくそら

よのあるくそまりとらあは葉のらじうも

兵と葉の地地名前見八言抄初卷葉と

の葉とら社と木とそら水と葉と葉のたはく

らうらうらみゆらあそくそらゆのたはく

若乃行端不富あつりらわくそらゆとそらわ

あつ今葉也若のこつこつ若乃端也行と家乃端也若

たそそそそ若もそらあつこつこつそらゆとそら

らあつゆとらみゆらあゆ若の端とらゆとそら

らうらうらゆとあつあつ若もそらゆとそら

あつも又同端也一流とらうら若乃行葉あつりて

らうらうらゆと行の梅ねとらゆと行よそら

らあきとそら行らゆとら

そらゆとそら干海ま也

ゆあうらゆとそら

飯と師ありしや、子影の日記に、と云ふ先飯の記、
後社条より飯と僧討とあり、はつと別と作じり也
あつとせあり、いとくそ也

吉子日記、女依の好ともいふ、とて、男と先とせり
わつとあり

此のちや、ちや、人の定法、いふこと
ふつと、く、ゆ、く、懐

いふこと、いふこと、風、な、ら、わ、ら、の、若、乞、
わらうた、い、く、そ、れ、
高座、
日、地、也、
白、氏、文、集、

あつと、いふこと、いふこと、いふこと、
一日、いふこと、いふこと、

心地観経曰、若善男子、善女人、發阿耨多羅三三菩提、
心、一日一夜出家修道、二百劫不墮地惡趣、常生善處、
受勝妙樂、遇善知識、永不退轉、得值諸佛、受善提記、

性金剛座成正覺

あつと、いふこと、いふこと、
そ、や、無、破、

人、い、く、と、いふこと、いふこと、
け、い、く、の、い、く、
又、見、可、人、

あつと、いふこと、いふこと、
一、夜、い、く、と、いふこと、
也、

あつと、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、

い、く、と、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、

い、く、と、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、
い、く、と、いふこと、いふこと、

紙と紙の間にしるしをいす

落書き

玉響をいすしるしあり又徳角をいすしるしあり
かゝりしるしあり

落書き

紙と紙の間にしるしをいす
玉響をいすしるしあり
徳角をいすしるしあり
かゝりしるしあり

紙と紙の間にしるしをいす

落書き

落書き

落書き



m

し

し

し

し

し

し

し

し

し

し

し

し

し

し

